

病虫害発生予察情報予報第2号（6月の予報）

佐賀県

目次

1. 6月の病虫害	1
2. 気象概要	2
3. 予報の内容・根拠等について	2
4. 6月の予報	
<u>普通作物</u> （水稻）	3
<u>果樹</u> （カンキツ、ナシ、ブドウ、果樹全般）	7
<u>茶</u>	14
<u>野菜</u> （イチゴ、アスパラガス）	17
5. <u>病虫害診断状況</u>	21
6. <u>全国・佐賀県で多発生している病虫害及び新たに発生した病虫害</u>	22
7. <u>農薬の適正使用について</u>	23

今月のトピックス

6～8月は、農薬危害防止運動の実施期間となっています。農薬の安全かつ適正な使用や保管管理を徹底しましょう。



水稻のスクミリンゴガイ



カンキツ黒点病



イチゴのうどんこ病



チャのクワシロカイガラムシ（越冬世代）

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部
〒840-2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952)45-8153 FAX (0952)45-5085

2. 気象概要

【3ヶ月予報 平成26年5月23日 福岡管区気象台発表】

6月は、平年に比べ曇りや雨の日が少ない見込みです。

6月の要素別確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	30	30	40
降水量	40	40	20

各病害虫の「予報の根拠」として、上記の向こう1か月の気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

上記の気象予報(確率予報)の内容について、本文中では便宜上、「気温並」、「降水量やや少」と簡略的に表現しています。

【参考】

要素	平年値 (佐賀市)	平年差(比)の平年並の範囲 (九州北部地方)
6月の平均気温	23.3℃	-0.3℃ ~ +0.4℃
6月の降水量	339.0mm	82% ~ 121%

3. 予報の内容・根拠等について

病害虫の発生量(平年比)

○予報の発生量は平年(佐賀県の過去10年間)及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

○留意点として、平年値との比較であるため、平年値が低い病害虫は、「平年より多い」場合でも見かけの発生は多くないことがあります。一方、発生が毎年目立ち、平年値が高い病害虫は、「平年並」や「平年よりやや少ない」場合でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

予報の根拠

○予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

○それぞれの条件は、少発生(－)、やや少発生(－～±)、並発生(±)、やや多発生(±～＋)、多発生(＋)として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

写真

○1ページ目には、予報で対象とした病害虫の写真を抜粋して掲載しています。

○3ページ目以降には、巡回調査時の各作物の生育状況の写真を掲載しています。

4. 6月の予報

普通作物

【概要】

作物名	病虫害名	発生量		病虫害防除の てびきの記載 ページ	備考
		平年比	前年比		
早期水稲 (上場地域)	葉いもち	並	やや少	125～134 137～143	
	イネミスヅウムシ	多	多	167～168 179～180	
山間早植え 水稲	葉いもち	並	並	125～134 137～143	
	イネミスヅウムシ	やや少	少	167～168 179～180	
普通期 水稲	葉いもち	やや多	やや多	125～134 137～143	
	スクミリンゴガイ	並	並	173～175	
水稲全般	縞葉枯病(ヒメビウカ)	やや少	やや多	160～161	
	萎縮病(ツマグロヨコバイ)	並	並	164～165	近年、本病の発生 は認めていない。

【特記事項】

- 育苗期に苗いもちが確認された場合は、早急に取り除くとともに防除を行う。本田でのいもち病の発生が例年多い地域では、育苗箱施薬剤を必ず施用する。
- 育苗箱施薬剤は施薬量が少ないと防除効果が低下するので、適正な量进行处理する。

水稲（早期、上場地域）

（巡回調査日：5月22日）



巡回調査時の生育状況

1. 葉いもち

1) 予報の内容

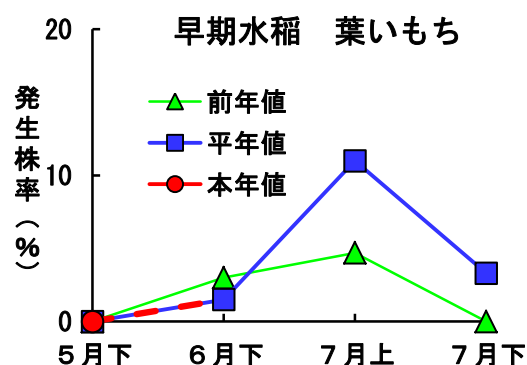
発生量：平年並（前年よりやや少）

2) 予報の根拠

- 巡回調査では、発生を認めていない（発生株率：平年0%、前年0%）。〈±〉
- 気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-～±〉（降水量やや少：-～±）

3) 防除上注意すべき事項

- 補植用苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるのですみやかに処分する。
- 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。



2. イネミズゾウムシ

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1)巡回調査では、食害株率は62.3%（平年35.6%、前年20.3%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉
 - (2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1)本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら粒剤を散布する。

水稻（山間早植え）

（巡回調査日：5月21日）



巡回調査時の生育状況

1. 葉いもち

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1)巡回調査では、発生を認めていない（発生株率；平年0%、前年0%）。〈±〉
 - (2)気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-~±〉（降水量やや少：-~±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1)補植用苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるのですみやかに処分する。
 - (2)葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

2. イネミズゾウムシ

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年より少ない）
- 2) 予報の根拠
 - (1)巡回調査では、食害株率は0.3%（平年2.6%、前年6.3%）であり、平年よりやや少なく前年より少ない。〈-~±〉
 - (2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1)本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら粒剤を散布する。

水稻（普通期水稻）

1. 葉いもち

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1)前年の穂いもちの発生状況
平成25年の穂いもちの発生株率は、普通期水稻（10月上旬）で13.2%（平年4.8%）であり、平年より多かった。〈+〉
 - (2)水稻籾のいもち病菌保菌率
昨年の巡回調査時に県内各地の任意の圃場から採取した籾のいもち病菌保菌率は、普

通期水稲のウルチ品種で1.9%（平年0.4%）、普通期水稲のモチ品種で0%（平年0.3%）であり、普通期のモチ品種では平年並であるが、うるち品種においては平年より高く（ここ十年で一番高い）、菌密度は高いと考えられる。（平年は平成16～24年産籾保菌率の平均値）〈±～+〉

(3) 気象予報ではやや少発生の条件となっている。〈-～±〉（降水量やや少：-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生の多い地域では、育苗箱施薬剤を施用する。

(2) 補植苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので速やかに処分する。

(3) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

2. スクミリングガイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 越冬状況

① 平成26年4月に調査した用排水路における平均越冬生貝率は、21.6%と平年(56.3%)よりやや低かった。〈-～±〉

② 平成25年12月～平成26年2月の平均気温が6.74℃と平年(6.59℃)並であったことから、水田内での越冬生貝率は平年並と推定される（過去の冬期の気温と翌春の貝の越冬生貝率との解析の結果、両者の間に明確な正の相関が認められている）。〈±〉

（詳細は平成26年4月25日付け予報第1号参照）

(2) 気象条件

気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 用排水路・クレークにおいて密度の高い地域では、貝及び卵塊を捕殺する。

(2) 発生圃場では、浅水管理を徹底する。

(3) 発生が多い圃場では、薬剤防除を行う。

水稲（全般）

1. 縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 現在、早期水稲では本病の発生を確認していない。〈±〉

(2) ヒメトビウンカ第1世代幼虫の小麦における生息密度は、すくい取り調査で28.4頭（平年18.5頭、前年9.0頭）と平年よりやや多く前年より多い（第1、2表）。〈±～+〉

(3) 平成26年度のヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、県下全体で0%（平年1.9%、前年1.0%）と平年より少なく前年よりやや少ない（第1、3表）。〈-〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病はヒメトビウンカが媒介するため、ウンカ類を対象とした育苗箱施用剤を使用する。

(2) 発病株が認められた圃場では、発病株を抜き取るとともに、薬剤によるヒメトビウンカの防除を行う。

第1表 各調査地点におけるヒメトビウンカの発生とイネ縞葉枯病ウイルス保毒状況（平成26年）

調査地点	小麦圃場でのヒメトビウンカの発生	ウイルス保毒状況	
	20回すくいとり虫数 (2圃場平均 ; 5月16~21日)	検定虫数	保毒虫数
	頭	頭	頭
佐賀市1	11.0	42	0
佐賀市2	0.0	2	0
鳥栖市	9.0	13	0
神埼市	15.0	40	0
小城市1	15.0	25	0
小城市2	0.0	2	0
多久市	13.0	36	0
武雄市	27.0	50	0
鹿島市	15.5	40	0
吉野ヶ里町	6.5	35	0
白石町	200.0	65	0
平均	28.4	県内保毒虫率 0/350*100= 0%	

第2表 小麦（黄熟期～成熟期）でのヒメトビウンカの発生状況（20回すくい取り虫数）

虫数	平成16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	平成
	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭
(県平均)	48.2	5.7	41.7	21.2	8.7	22.9	13.0	11.7	2.7	9.0	28.4	19.5

注) 5月中～下旬に、県内11～14地点の各2圃場ずつ調査を実施(平成26年の詳細は第1表参照)。

第3表 近年のヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移

保毒虫率	平成16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	平成
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
(県平均)	0.4	3.1	3.3	2.1	0.9	1.6	1.3	4.2	0.9	1.0	0	1.9

注) 5～6月にヒメトビウンカを小麦圃場から採集して検定を実施(平成26年の詳細は第1表参照)。

2. 萎縮病(ツマグロヨコバイ)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 現在、早期水稻では本病の発生を確認していない。〈±〉

(2) 平成25年秋に採集したツマグロヨコバイを検定したところ、イネ萎縮病ウイルス保毒虫は確認されなかった（平年0%、前年0%）（第4表）。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発病株は抜き取る。

第4表 近年のツマグロヨコバイのイネ萎縮病ウイルス保毒虫率の推移

保毒虫率	平成15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	平成
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
(県平均)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

注) 9～10月にツマグロヨコバイを水稻圃場から採集して検定を実施。平成25年は472頭を検定した。

果 樹

【概要】

作物名	病虫害名	発生量		病虫害防除 のてびきの 記載ページ	備 考
		平年比	前年比		
カンキツ	そうか病	並	並	216～218	
	かいよう病	やや少	並	220～222	
	黒点病	並	並	218～220	
	灰色かび病	並	やや少	222～223	
	ミカンハダニ	やや多	やや少	244～249	
	チャノキイロアザミウマ	並	並	237～244	
ナシ	黒星病	やや多	やや多	282～287	平成26年5月9日付け病害 虫対策資料第3号参照
	ナシヒメシクイ	並	やや多	298～301	
ブドウ	黒とう病	並	並	322～324	
	べと病	並	並	326～328	
	褐斑病	並	並	329～330	
	チャノキイロアザミウマ	並	並	336～337	
果樹全般	カメムシ類	並	多	カンキツ：251～254 ナシ：301～302 ブドウ：342 平成26年5月21日付け病害 虫対策資料第4号参照	

【特記事項】

[カンキツ]

- 梅雨期はカンキツ黒点病の主要感染期にあたるので防除を徹底する。なお、マンゼブ水和剤及びマシン油乳剤加用時の散布間隔の目安は、本文中の「3. 黒点病 3) 防除上注意すべき事項」を参照する。

[ナシ]

- ナシでは、黒星病の発病葉や発病果実は除去し、園外で処分する。また、6月下旬～7月上旬は主要な感染期であるため、DMI剤を用いた防除を必ず実施する。

[ブドウ]

- 大豆大の時期から袋かけ前まで薬剤による果面の汚れや果粉の溶脱が発生しやすいため、小豆大の時期までの薬剤防除を徹底する。

[キウイフルーツ]

- 県内において、かいよう病の発生が確認されている。疑わしい症状が見られた場合は、関係機関へすぐに連絡する。[\(平成26年5月22日付け病虫害発生予察情報特殊報第2号参照\)](#)

[果樹全般]

1. 果樹カメムシ類については、こまめに園内を見て回り、確認した場合は早急に防除を行う。
2. スピードプレイヤーで薬剤散布する場合は、全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなどして、丁寧に散布する。また、ナシ・ブドウにおいて手散布する場合は、薬液が十分かかるように棚の上下両方向から行う。

カンキツ

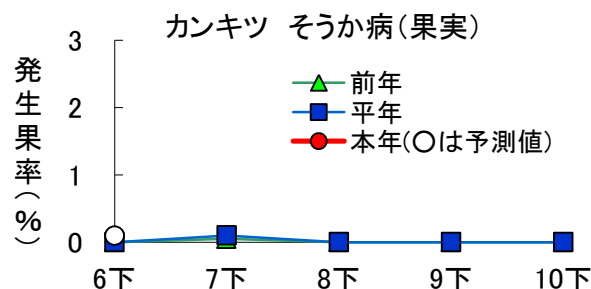
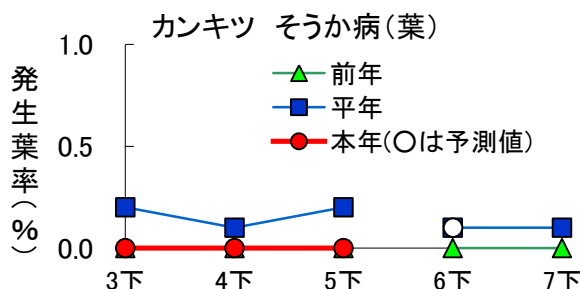
(巡回調査日：5月20日～23日)



巡回調査時の生育状況

1. そうか病

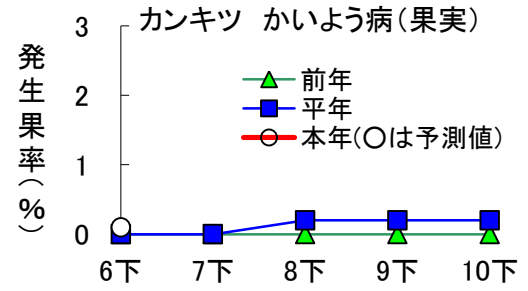
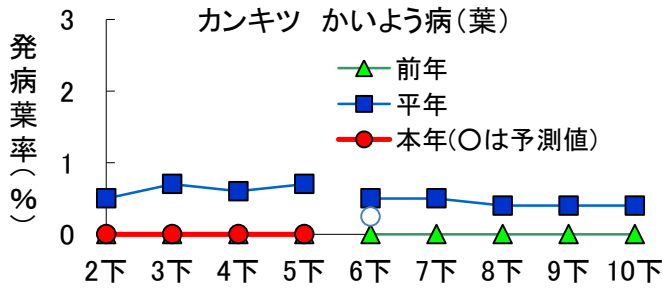
- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1)巡回調査では、温州みかん葉での発生を認めていない。（発病葉率：平年0.2%、前年0%）〈±〉
 - (2)気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-～±〉（降水量やや少：-～±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1)落弁期以降にデランフロアブルとマシン油乳剤を混用又は近接散布すると、果実に薬害を生じる場合がある。ただし、その間に200mm以上の降雨があれば生じることは少ない。



注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査

2. かいよう病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1)巡回調査では、温州みかん葉での発生を認めていない。（発病葉率：平年0.7%、前年0%）〈-～±〉
 - (2)気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-～±〉（降水量やや少：-～±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1)本病が問題となる園（ネーブル、いよかん、はるみ等の中晩柑、高糖系温州が植栽された園、幼木園、高接園、風当たりが強い園）では、無機銅剤による防除を行う。
 - (2)無機銅水和剤（クレフノン200倍加用）を用いて定期的（20～25日間隔）に防除を行う。
 - (3)発病した枝や葉は今後の伝染源となるので除去する。ただし、強剪定すると枝が遅くまで伸長し、本病にかかりやすい期間が長くなるので行わないこと。



注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査

3. 黒点病

1) 予報の内容

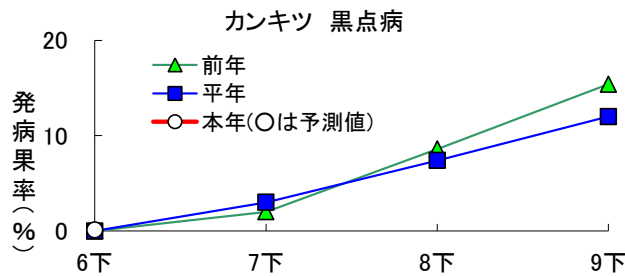
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-~±〉（降水量やや少：-~±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病した枝や葉は今後の伝染源となるので除去する。
- (2) 梅雨期は果実への主要感染期にあたるので防除を徹底する。マンゼブ水和剤散布後の積算降雨量が200mm~250mmに達した時点を次回の散布の目安とする。
- (3) 黒点病の防除薬剤にマシン油乳剤を加用した場合は、薬剤散布後の積算降雨量300~400mmを次回の防除の目安とする。なお、同雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次回の散布を行う。
- (4) 園内湿度を下げるために防風樹の剪定等を行い、通風をよくする。



4. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや少ない）

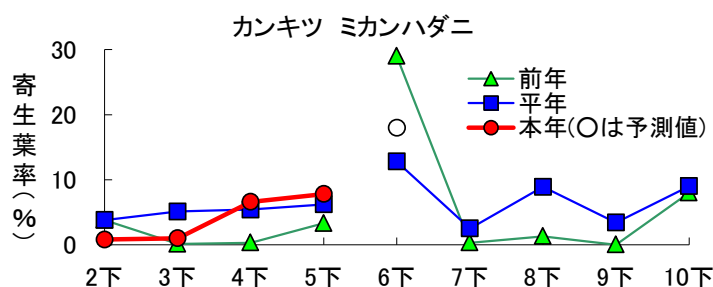
2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、平均寄生葉率は7.8%（平年6.2%、前年3.3%）であり、平年並で前年よりやや多い。〈±〉

(2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±~+〉（降水量やや少：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ種類の薬剤は年1回の使用とする。また、前年使用した殺ダニ剤は使用しない。
- (2) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫の数が0.5~1頭）に防除を行う。



ナシ

(巡回調査日：5月21日)



巡回調査時の生育状況

1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、平均発生葉率は2.3%（平年1.2%、前年0.3%）であり、平年よりやや多く前年より多いが、発生が多い圃場は一部に限られる。〈±〉

(2)巡回調査では、平均発生果率は4.8%（平年0.8%、前年0.5%）であり、平年及び前年より多いが、発生が多い圃場は一部に限られる。〈±～+〉

(3)気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-～±〉（降水量やや少：-～±）

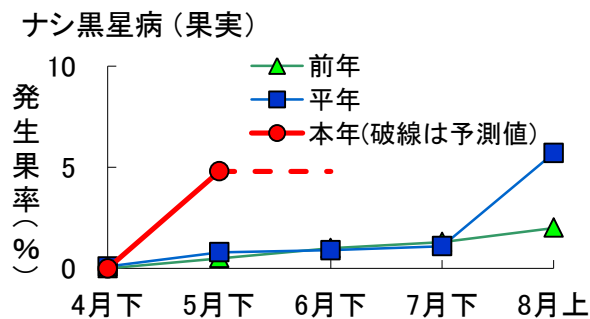
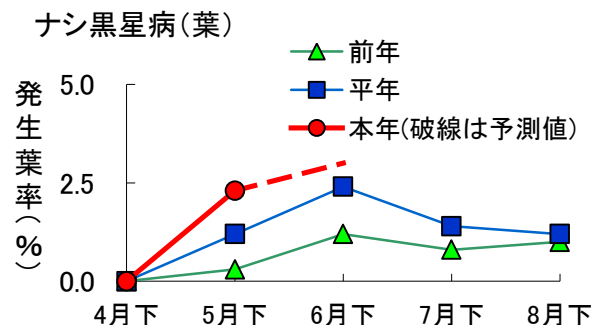
3) 防除上注意すべき事項

(1)DMI剤耐性菌の発生を防止するために、5～6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用する（薬剤は施肥・病害虫防除・雑草防除のてびきP282～287を参照）。ただし、発病が認められた場合や長雨等で薬剤散布ができなかった場合はDMI剤を散布する。

(2)発病葉や発病果実は除去し、園外で処分する。また、6月下旬～7月上旬は主要な感染期であるため、DMI剤を用いた防除を必ず実施する。

(3)スピードスプレーヤーで薬剤散布する場合は、全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなどして、丁寧に散布する。

(4)その他詳細については、[平成26年5月9日付け病害虫対策資料第3号](#)を参照する。



2. ナシヒメシンクイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

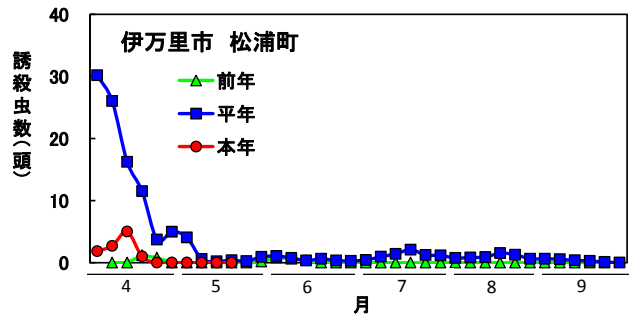
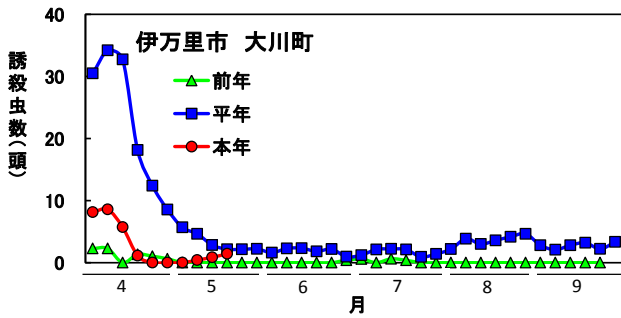
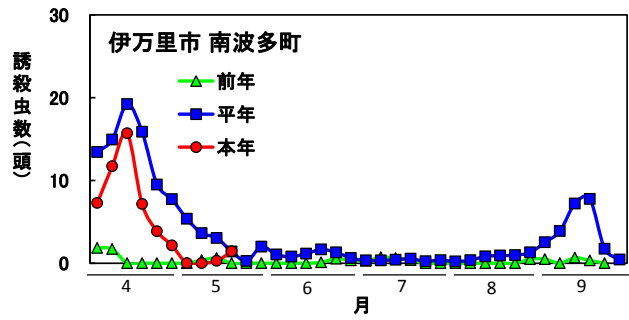
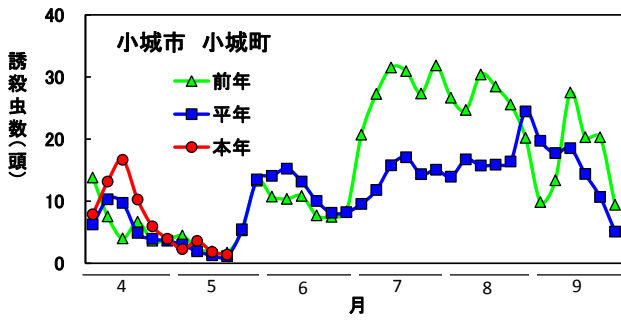
2) 予報の根拠

(1)フェロモントラップによる4月上旬～5月中旬の誘殺虫数の平均は38.3頭（平年96.8頭、前年17.4頭）で、平年よりやや少なく前年よりやや多い。〈-～±〉

(2)気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉（降水量やや少：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1)交信攪乱フェロモン剤を設置していない園では、6月上旬までに早急に設置する。



フェロモントラップによるナシヒメシクイの誘殺推移
(小城市は果樹試験場、伊万里市は西松浦農業改良普及センター調査)

ブドウ

(巡回調査日：5月20日～22日)



巡回調査時の生育状況

1. 黒とう病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

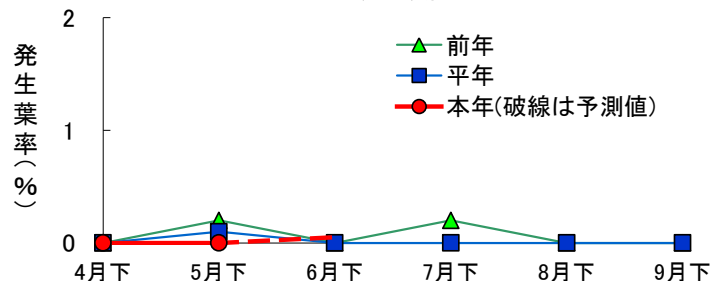
2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生を認めていない。（発病葉率：平年0.1%、前年0.2%）〈-～±〉
- (2)気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-～±〉（降水量やや少：-～±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1)発病した枝の剪除と巻きひげの処分を徹底する。

ブドウ 黒とう病



2. ベと病

1) 予報の内容

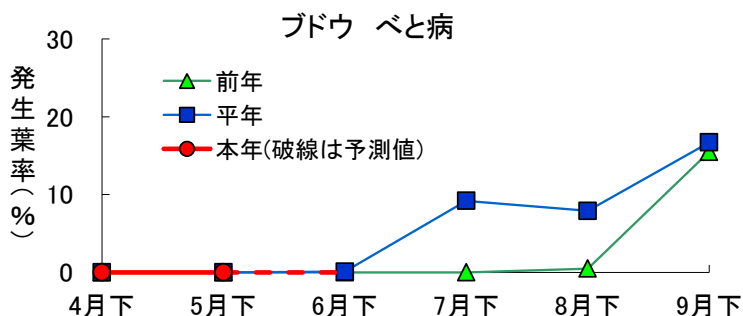
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生を認めていない（発病葉率：平年0%、前年0%）。〈±〉
- (2)気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-～±〉（降水量やや少：-～±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 降雨により感染が進展するため、降雨前の予防散布を行う。
- (2) ブドウべと病では、ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等）に対する感受性が低下しているため、本病の防除には使用しない。



3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

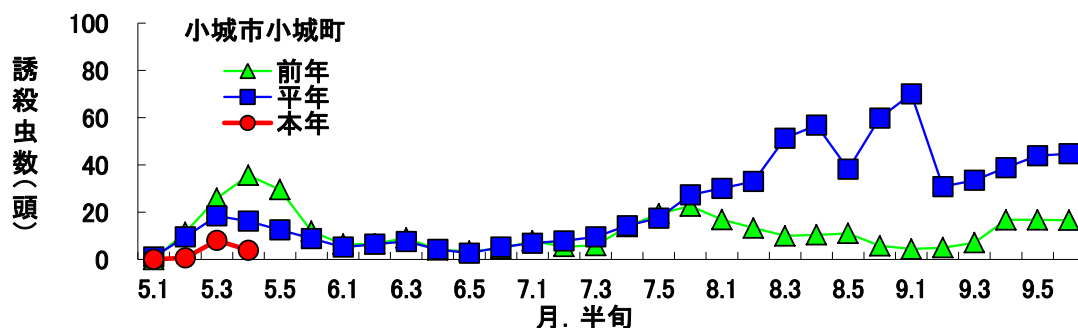
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 黄色粘着板トラップによる5月上中旬の誘殺数は、平年及び前年よりやや少なく推移している。〈-~±〉
- (2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±~+〉（降水量やや少：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 6月中旬~7月中旬は主要な加害時期であるので、袋かけ前後の薬剤防除を徹底する。
- (2) 袋かけ前（大豆大期）に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。
- (3) 袋内への侵入を抑制するために、袋のしめ口をしっかりと締める。



黄色粘着板トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移
(果樹試験場調査)

果樹全般

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1) 平成26年1月に常緑広葉樹林の落葉中におけるチャバネアオカメムシ成虫の越冬状況を県内22地点で調査した結果、0.30頭/m²（平年 0.48頭/m²、前年 0.06頭/m²）で、平年並で前年より多い。
- (2) 予察灯（3地点、図1）およびフェロモントラップ（6地点、図2）による平均誘殺数は平年並~やや少ない。〈-~±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) こまめに園内を見て回り、確認した場合は早急に防除を行う。
- (2) 果樹カメムシ類は樹高の高い樹木に一旦飛来して、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くないように剪除する。
- (3) 合成ピレスロイド剤等を散布するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖（リサージェンス）を生じる場合があるので、これら害虫の防除対策も実施する。
- (4) その他詳細については、[平成26年5月21日付け病害虫対策資料第4号](#)を参照する。

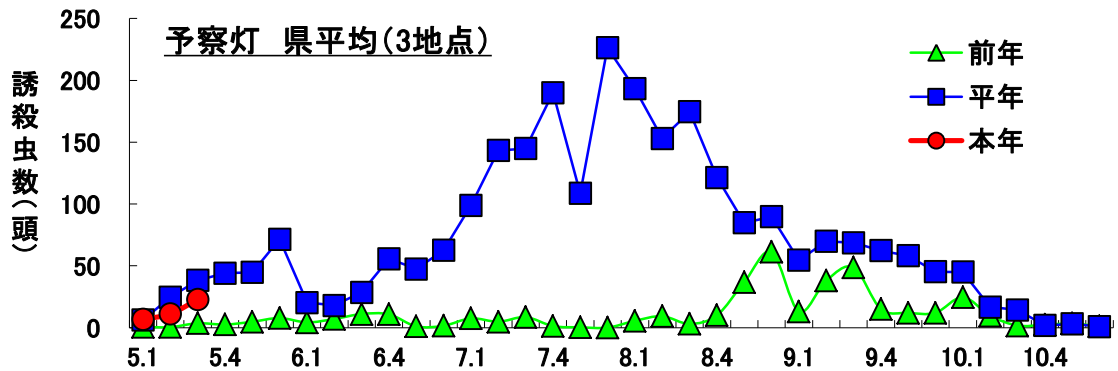


図1 予察灯（佐賀市、小城市、太良町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

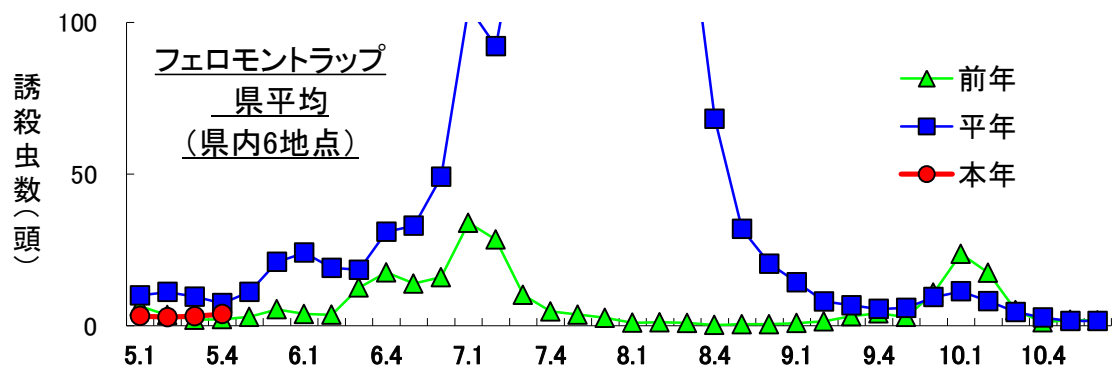


図2 フェロモントラップ（小城市、伊万里市、鹿島市、唐津市浜玉、唐津市鎮西、基山町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

茶

【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除の てびきの記載 ページ	備考
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	並	並	397～398	
	クワシロカイガラムシ	やや少	並	405～406	
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	多	402～403	
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並	403～404	
	チャノコカクモンハマキ	並	並	400～402	
	チャノホソガ	やや少	並	399～400	

【特記事項】

1. 県内において、チャトゲコナジラミの発生が確認されている。疑わしい葉が見つかった場合には、すぐに関係機関へ連絡する。(平成26年4月9日付け病害虫発生予察情報特殊報第1号参照)防除対策は、ホームページ掲載の「[チャトゲコナジラミの防除対策](#)」を参照する。
2. 二番茶は萌芽から摘採までの期間が短いので、茶園をよく観察し早期防除に努める。
3. ナガチャコガネは、5月下旬～6月中旬頃に防除適期である羽化期～成虫飛来初期を迎えるため、摘採前使用日数に注意して防除を行う。
4. クワシロカイガラムシの幼虫ふ化期は5月中旬～下旬であるが、園内のふ化状況を観察し、防除適期のふ化最盛期に防除を行う。

茶

(巡回調査：5月21～23日)

1. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

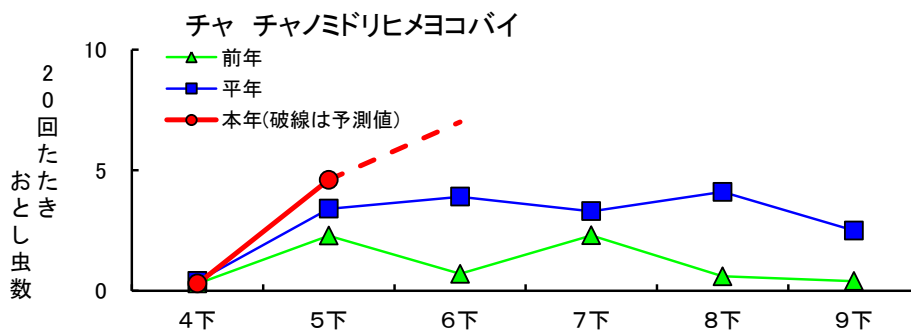
- (1)巡回調査では、20回たたき落とし虫数は4.6頭（平年3.4頭、前年2.3頭）であり、平年よりやや多く前年より多い。〈±～+〉
- (2)気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉



巡回調査時の生育状況

3) 防除上注意すべき事項

(1) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。



2. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

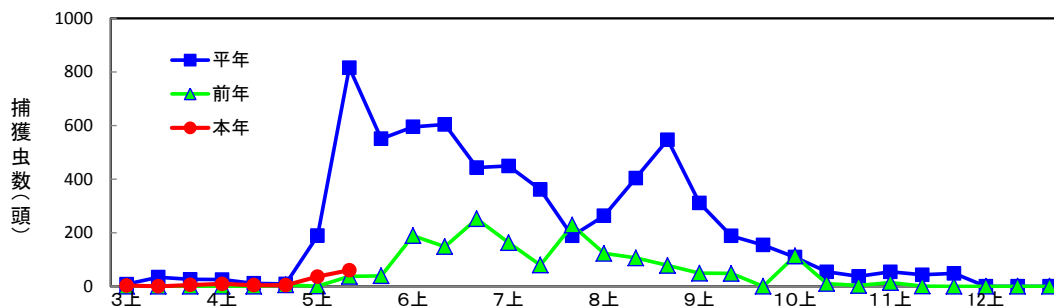
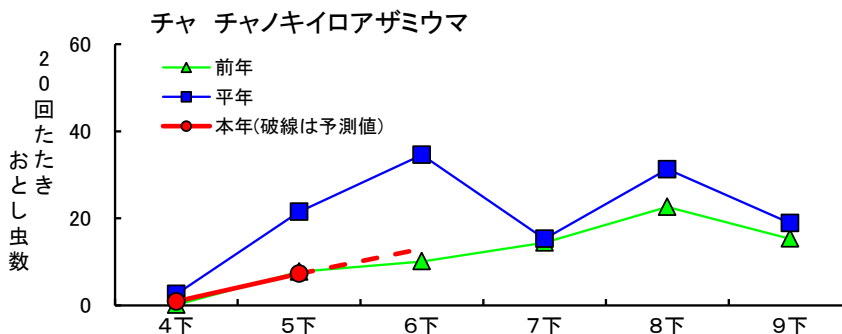
発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、20回たたき落とし虫数は7.3頭（平年21.5頭、前年7.7頭）で、平年および前年並である。〈±〉
- (2) 吸引粘着トラップによる捕獲虫数は、4月下旬が4頭（平年9頭、前年5頭）、5月上旬が36頭（平年189頭、前年1頭）、5月中旬が60頭（平年816頭、前年37頭）と平年より少なく前年並で推移している。〈-〉
- (3) 気象予報ではやや多発生の条件となっている。〈±~+〉（降水量やや少：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫は葉裏に生息することが多いので、葉裏にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの捕獲虫数の推移
(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

3. チャノコカクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

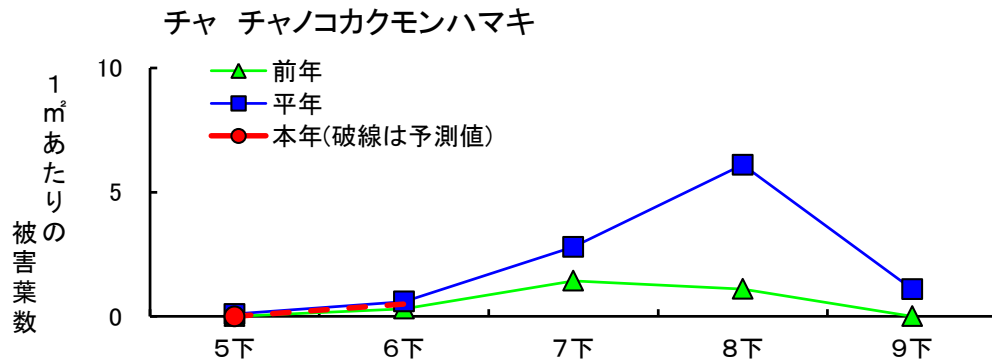
(1) 巡回調査では、発生を認めていない（1m²あたりの被害葉数：平年0.1枚、前年0枚）。
〈±〉

(2) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉がつづられはじめると防除効果があがらないので、つづられた葉が少しでもみられたら直ちに防除を行う。

(2) 二番茶期の防除は、伸育状態によって摘採までの日数を決めて薬剤を選択する。



野 菜

【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除の てびきの記載 ページ	備考
		平年比	前年比		
イチゴ (育苗圃)	うどんこ病	並	やや多	183～186	4月25日付け病害虫 対策資料第1号参照
	苗立枯症	並	並	187～193	
	ハダニ類	並	並	194～195	
	アブラムシ類	並	やや多	199～200	
アスパラ ガス	茎枯病	並	並	291～292	
	褐斑病	並	並	292～293	
	斑点病	並	並	292	
	アザミウマ類	並	並	294	
	ハダニ類	並	やや多	294～295	
	アブラムシ類	並	並	295	

【特記事項】

- イチゴうどんこ病は、育苗圃での発生が本圃での発生につながるため、育苗期の薬剤防除を徹底し、健全苗の育成に努める（[平成26年4月25日付け病害虫対策資料第1号参照](#)）。
- イチゴの炭疽病については、ビニル雨よけや水滴の小さい灌水装置を利用して、水はねによる菌の飛散を防ぐとともに、親株からの定期的な薬剤防除を徹底する。なお、ゲッター水和剤及びセイビアーフロアブル20については、耐性菌の発生・蔓延を防ぐため、育苗期における使用回数を各3回以内にとどめる（[平成26年4月25日付け病害虫対策資料第1号参照](#)）。
- 施設果菜類では、栽培終了後にコナジラミ類やアザミウマ類が圃場外へ飛び出さないよう、ハウス密閉処理を行う。
- アスパラガスでは、茎枯病の発生を防ぐために、強い雨風のときはサイドビニルを下ろす等の対策を行う。

イチゴ（育苗圃）

（巡回調査：5月19日～22日）



巡回調査時の生育状況

1. うどんこ病

1) 予報の内容

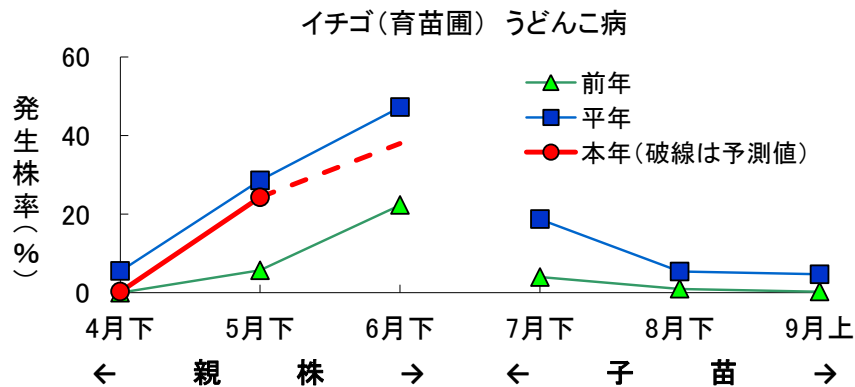
発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- 巡回調査では、発生株率は24.3%（平年28.6%、前年5.7%）であり、平年並で前年よりやや多い。〈±〉
- 気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-～±〉（降水量やや少：-～±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏やランナー先端の子苗にも薬液が十分かかるように散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3) 詳細な防除対策は [平成26年4月25日付け病害虫対策資料第1号](#) を参照する。



2. 苗立枯症 (炭疽病・疫病)

1) 予報の内容

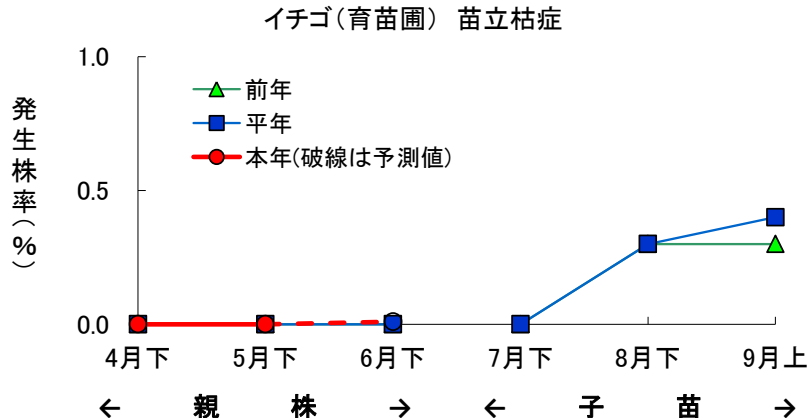
発生量：平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生を認めていない (発生株率：平年0%、前年0%)。〈±〉
- (2) 気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-~±〉 (降水量やや少：-~±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 降雨が多い梅雨期は病原菌の飛散、感染に好適な時期であるため、防除を徹底する。
- (2) 罹病株はすみやかに圃場外へ持ち出し、適切に処分する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (4) 詳細な防除対策は [平成26年4月25日付け病害虫対策資料第1号](#) を参照する。



3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年並)

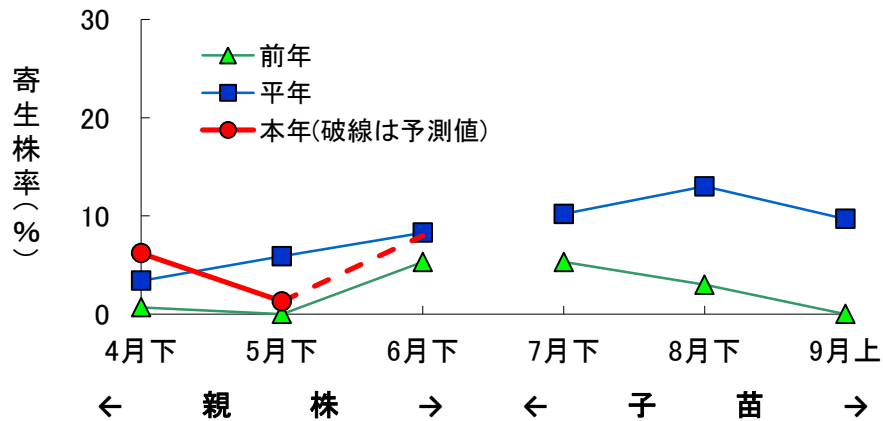
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は1.3% (平年5.9%、前年0%) であり、平年および前年並である。〈±〉
- (2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±~+〉 (降水量やや少：±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

イチゴ(育苗圃) ハダニ類



アスパラガス

(巡回調査: 5月19日~21日)



巡回調査時の生育状況

1. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生を認めていない (発生株率: 平年0.6%、前年0%)。〈±〉

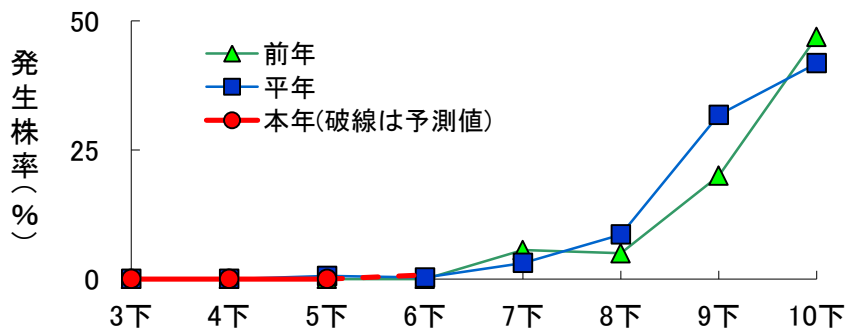
(2) 気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-~±〉 (降水量やや少: -~±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病葉は早急に除去・処分し、防除を徹底する。

(2) 過繁茂にならないよう、茎葉を適切に管理し、通風をよくする。

アスパラガス 褐斑病



2. 斑点病

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

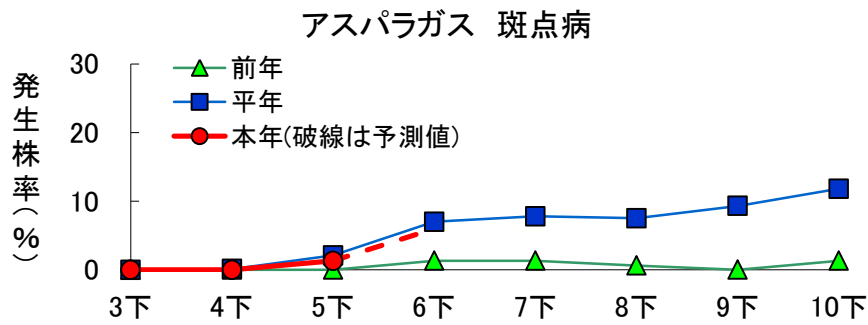
(1) 巡回調査では、発生株率は1.3% (平年2.1%、前年0.6%) であり、平年および前年並である。〈±〉

(2) 気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-~±〉 (降水量やや少: -~±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病葉は早急に除去・処分し、防除を徹底する。

(2) 過繁茂にならないよう、茎葉を適切に管理し、通風をよくする。



3. アザミウマ類 (ネギアザミウマ)

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

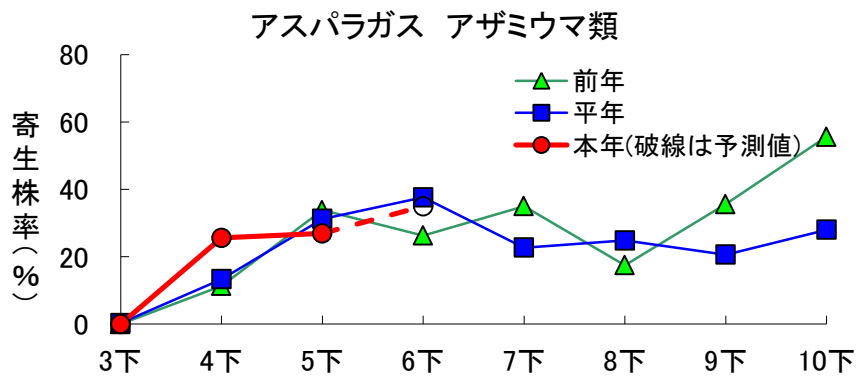
(1) 巡回調査では、寄生株率は26.9% (平年31.2%、前年33.8%) であり、平年及び前年並である。〈±〉

(2) 気象予報では、並発生条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難であるため、低密度時からの防除を徹底する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



5. 病害虫等診断依頼状況

平成26年4月21日～平成26年5月20日までに農業技術防除センター及び各試験研究機関に持ち込まれ、同期間中に診断が完了した病害虫の診断結果は次のとおりです。

作物名		依頼件数	診断結果(件数)
普通作	計	0	
果樹	ウメ	1	葉害(1)
	スモモ	1	葉害(1)
	ナシ	1	サビダニ類による食害(1)
	ブドウ	2	灰色かび病(1)、つる割病(1)
	計	5	
野菜	アスパラガス	3	灰色かび病(1)、疫病と立枯病の混合感染(1)、生理障害等(1)
	イチゴ	3	細菌による葉および葉柄の斑点(1)、芽枯病(1)、生理障害等(1)
	キクイモ	1	生理障害等(1)
	小ネギ	1	生理障害等(1)
	タマネギ	5	べと病(2)、灰色腐敗病(1)、ネギアザミウマ(1)、生理障害等(1)
	トウモロコシ	2	生理障害等(2)
	パセリ	1	ピシウム属菌による苗立枯れ(1)
	パプリカ	3	菌核病(1)、白絹病(1)、輪紋病(1)
	ピーマン	2	菌核病(1)、生理障害等(1)
	ハウレンソウ	1	アザミウマ類による食害(1)
	ミディトマト	1	チャノホコリダニの食害(1)
	計	23	
花き	キク	2	えそ病(2)
	トルコギキョウ	2	立枯病(1)、生理障害等(1)
	ホオズキ	6	モザイク病(1)、立枯病(1)、生理障害等(4)
	計	10	
その他	甘草	1	生理障害等(1)
	樹木類(薬用)	1	コレトリカム属菌による葉枯症(1)
	計	2	

合計： 20 作物
40 件

内訳	糸状菌による病害	: 16件
	細菌による病害	: 1件
	ウイルス・ウイロイドによる病害	: 3件
	害虫類	: 4件
	線虫類	: 0件
	生理障害等	: 16件
	合計	40件

6. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に4月22日～5月23日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）				
発信元	内容	日付	作物	病害虫名
大分県	注意報	2014/04/18	麦類	赤かび病
群馬県	注意報	2014/04/23	作物全般	アブラムシ類
岡山県	注意報	2014/04/24	果樹類	果樹カメムシ類
福島県	注意報	2014/05/09	モモ	せん孔細菌病
長野県	注意報	2014/05/13	果樹、野菜、樹木	マイマイガ
奈良県	注意報	2014/05/14	ウメ・モモ・ナシ・カキ・ ブドウ・カンキツ	果樹カメムシ類
福井県	注意報	2014/05/14	野菜、花き	ネキリムシ類
北海道	注意報	2014/05/14	小麦	赤さび病
岐阜県	注意報	2014/05/16	果樹作物	マイマイガ
徳島県	注意報	2014/05/19	果樹全般	果樹カメムシ類
秋田県	注意報	2014/05/21	水稻	イネヒメハモグリバエ
三重県	注意報	2014/05/21	ナシ、カキ等	果樹カメムシ類
岐阜県	注意報	2014/05/22	果樹作物	果樹カメムシ類

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）			
発信元	日付	作物	内容
熊本県	2014/04/28	ピーマン	炭疽病
愛媛県	2014/05/02	キウイフルーツ	かいよう病（Psa3系統）
岡山県	2014/05/09	ブドウ	ネギアザミウマ
福岡県	2014/05/09	キウイフルーツ	かいよう病（新系統）
佐賀県	2014/05/22	キウイフルーツ	かいよう病（Psa3系統）

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

技術情報等（九州地方で発表されたもののみ）			
発信元	日付	作物	内容
鹿児島県	2014/04/23	サトウキビ	カンシャコバネナガカメムシ
佐賀県	2014/04/25	イチゴ	炭疽病、うどんこ病の防除対策について
長崎県	2014/05/07	茶	クワシロカイガラムシの防除対策について
佐賀県	2014/05/08	タマネギ	べと病の防除の徹底について
佐賀県	2014/05/08	ナシ	黒星病の防除対策について
長崎県	2014/05/15	露地びわ	ナシマルカイガラムシの防除対策について
佐賀県	2014/05/21	果樹	果樹カメムシ類の発生状況と対策について
熊本県	2014/05/22	麦類	赤かび病の発生状況について

注：太字は佐賀県が発表したものを示す

7. 農薬の適正使用を徹底しましょう！

水稻育苗箱に農薬を施用する場合は、**農薬が育苗箱からこぼれ落ちないように、畦畔等で行うか、育苗箱の下に不浸透性のビニルを敷く等の対策**をとり、散布しましょう。

**農薬の使用にあたっては、
以下のルールを必ず
守りましょう！**



**農薬は、登録農薬を適切に
使用しましょう！**

登録農薬にはラベルに「農林水産省登録第〇〇号」と書いてありますので、使用する前に必ず確認し、ラベルに書いてある農薬の使用基準を必ず守りましょう。

農林水産省登録
第〇〇〇〇〇号

ラベルの内容

- 作物名(使用できる作物の種類はどれか)
- 使用濃度、希釈倍率または使用量
- 使用時期(いつ、又はいつまで使用できるのか)
- 総使用回数(何回まで使用できるのか)等



(佐賀県植物防疫協会パンフレットより)